

昭和十九年六月十八日

空母翔鶴しやうかくと共に海没

福島県 五十嵐 清 一

大正十(一九二一)年九月十九日、福島県耶摩郡関柴村の農家の長男として生まれ育ちました。昭和十六(一九四一)年五月、十六年徴集兵として兵隊検査を受けましたが甲種合格でした。戦争突入の時期であったのか、農家の子弟が多かったのか、二十七人中、四人のみが第二乙以上で、二十三人が現役入営でした。私は、昭和十七年一月十日、横須賀第二海兵团へ入団し、海軍四等水兵を命ぜられました。三月十日、新兵教育教程を卒業、これは通信学校要員であったため三カ月を二カ月で卒業し、退団式が挙行されました。同日付で、海軍通信学校入校(第六十一期普通科電信術練習生)を命ぜられました。

学校は久里浜の通信学校でした。モールス信号の

「トン・ツー」から始まり、後に通信器の取扱い、通信法の教育を受けました。全世界同じ通信法規があるから、なかなか面倒なのですが、習うのに、学校と同じで試験が常にあるので、何としても覚えなければなりません。ある程度覚えた後に、野比・平塚・真鶴へ演習に行き、生徒同士がお互いに交信をしました。九月十三日～二十七日が野比、九月二十七日から十月十八日までが平塚でした。同期生の一個分隊は五〇人近くで、相対して演習をします。

十一月一日、職階改正で海軍一等水兵へと進み、十一月二十日、横須賀通信学校第六十一期普通科通信教程を卒業しました。

卒業と同時に、同日には軍艦「翔鶴」乗組を命ぜられました。艦はハワイ、インド洋、サンゴ海、南太平洋に参加したため、だいぶ損傷を受けていて、修理のため横須賀に入港していたのです。私はその日の夕方、横須賀の小海ドックで乗艦していたので、ミッドウエー海戦の時は通信学校で教育中でしたので参戦していませんでした。

昭和十八年三月二十八日、艦は修理を終え、呉へ向かって横須賀出港、その間、艦内で訓練をしました。

私は戦艦「陸奥」からの受信をしていました。三月三十日、給油のため徳山へ寄港し上陸、鹿児島へ、「翔鶴」の飛行隊長の根来部隊と、航空機の艦の発着訓練、通信訓練をしました。「翔鶴」は動くが、その飛行隊は陸上において移動する。そのため、通信は基地のみでは間に合わぬのです。

三月三十一日、根来隊勤務。四月二十四日、大分基地勤務、日豊線で大分空着、そこでの勤務でした。五月一日、上等水兵を命ぜられ、基地交替で本艦に復帰しました。二十五日、瀬戸内海で飛行機は発着訓練中、我々は艦内で通信の訓練をするというので、木更津沖から戻りました。

横須賀から、アリュージョン方面出撃目的で、急ぎ呉出発となりました。しかし、アツツ島が玉砕のため木更津から横須賀へ戻り、冬物を返納しました。

今度は横須賀から呉へ出航、瀬戸内海で発着訓練及

び各種戦闘訓練。艦内で他の艦や陸地からの受信。そのうち自分に必要なもののみ受信する。暗号は暗号員が解読する。我々には暗号の乱数表の数字しか分からない。それを受信する。ただし飛行機からは暗号でなく生で発信してくる。

七月六日入港、同日八島に回航。南洋、竹島、夏島等へ向け八島発。海軍の守備隊員その他の重要物資等を多数搭載する。「日進」「玉波」などとトラック島へ、七月十五日着。その間、竹島、春島等で基地を設営したり、飛行隊の訓練、しかも連日の航空教練でした。その内容は発着訓練・各種応急教練をしたのですが、その間に艦内では敵から爆撃、攻撃を受けた時の訓練、防火、防水等を毎日、毎日訓練しました。

九月十八日、トラック発―二十日、ブラウン環礁着。

二十三日、ブラウン発―二十五日トラック入港。

十月十七日、トラック発―十九日、ブラウン着。

二十三日、ブラウン発―二十六日、トラック入港。

トラック停泊中は艦の回りに網を張る（対魚雷用）。

十一月一日、命水兵長。隊はラバウルへ進出。ブーゲンビル島沖航空戦に出撃のため、ブーゲンビル島へ出撃しました。

十一月十一日、トラック発—横須賀に向かう。

十五日、岡田艦長は退艦、松原博大佐着任。

二十六日、トラックに向け横須賀出港。

十二月十二日、トラック出港—十二月十七日、横須賀着ですが、その間空襲はありませんでした。

十二月二十七日、ドック入り、横須賀工廠でしたので東京方面に外出し、帰京して久しぶりに懐かしい家族と会い、お互いに元気でいたことを喜び合いました。何しろ、家族は私がどこでどう戦っているか分かりません。また、私の方も再びいつ会えるのかなども分からない。これが最後の別れかとも心の中で思っておりました。陸軍は一人一人の戦いですが、海軍は、軍艦同士の戦で、生死は艦と共にであることは実戦で体験していたからです。

村役場などに挨拶などしているうちに正月も過ぎ、

昭和十九年一月六日、ドックから出発、十七日、横須賀港を出港しました。二十七日、徳山、大分沖などを経て呉に入港し、二月六日、内海西部を出港。二十日、リング泊地回港。五月十二日、リング出港。十五日、タウイタウイに進出、同泊地にて「あ号作戦」の準備並びに諸訓練をして待機していました。

ビアク作戦にて戦艦「大和・武蔵・金剛・山城」の他が出撃しました。待機艦の航空母艦「大鳳・翔鶴・瑞鶴・飛鷹・隼鷹・竜鳳・千代田・千歳・瑞鳳」等九隻など一〇〇隻近く並んでいましたが、二三日でやられてしまいました。

六月十三日、タウイタウイ出撃。ギマラス（比）の洋上で燃料を補給しました。六月十五日、ギマラス発、「あ号作戦」のためマリアナ沖へ進出、十八日に作戦が開始されたのです。

午前三時、牽敵のため艦上偵察機が出発、〇五・〇〇一〇六・三〇、「米空母四隻、発見！」の報にて、

この報告は、我々が受けました。その間には暗号なので、我々には何が何だか分からない。数字を打ち、数字を受けただけ。しかし、この時は、実は大変な時だったのです。

本艦隊（航空）には、艦上戦闘機（紫電・雷電）、艦上爆撃機（彗星）、艦上攻撃機（天山）合わせて二六〇機を発進させたといえます。この時、米機動部隊はまだ索敵機からは「日本空母隊、発見！」の報は届いていませんでした。

ところが、午前一〇時、レーダーが日本機の大編隊来襲を感知し、直ちに四五〇機の戦闘機が舞い上がったといえます。敵は空母十五隻を基幹としており、八九一機の艦載機をもって我が飛行隊を迎撃したので、決戦は悲壮なものとなったのです。

私共は「翔鶴会」という戦友会をしています。その折、各人が当時の資料等を持ち寄っています。その状況がだんだんと分かってきました。我々は、飛行隊が発進した時、相当の戦果を挙げて帰って来る

と期待していたのですが、米迎撃隊との決戦に負けてしまいました。我が艦の航空隊はほとんど帰らず、また、我が航空母艦もやられ、帰ってきた飛行機は帰る艦はなく、海上に着水して沈んでいったのです。その状況は本当に悲惨なものでした。

しかもその間、敵潜水艦「カヴァラ」の魚雷が、我が「翔鶴」の右舷艦橋下に命中し、私のいた第一受信室は大音響と共に、棚の物は散乱、落下し、廊下の扉を開けようとしたら、火災の炎が入って来て出られないので窓から出て消火に努めました。

しかし、第二発目、第三発目に続いて更に第四発目も命中しました。応急隊員等の必死の防火等の効果なく、ガソリンタンクや魚雷が誘爆発し艦内は熱風に包まれ、遠くからきた熱風でも顔や手など、露出している箇所は火傷を負いました。

先程申した、第一受信所からの脱出状況を話します。受信室の舷窓から脱出しようとしても窓の大きさは直径三〇センチもありません。出るに出不れず、火

災の熱風はある。それでも、やっと脱出し短艇甲板に出て、あちこち回り飛行甲板に出ましたが、艦は左傾し、艦首を上沈み始めました。

艦長は「軍艦旗降ろし！」を命令し、艦長は訓示をしました。「まだ、天城・葛城等の空母があるから、これから負けない……」とし、「総員退出！」の命が下ったのですが、艦は急傾斜して一気に沈没しました。

リフトに入った人は助からなかった。その人は艦と一緒に沈没してしまったのです。私は、訓示を受け終わったのが飛行甲板だったので、一度引っかかったのですが、その後海へ飛び込みました。資料によれば、午後二時一分、沈没とのことでした。

私は、早めに転落したので浮上できました。浮上すると、次に飛び込んだ人がその上に来る、ですから、我々は沈んで浮かび、浮かんで沈むという繰り返しのうちに、ようやく助かったのです。

飛行甲板と海面との間は一〇メートル位なのですが、傾斜しているので海へ飛び込むというより落ちて

しまったのです。艦長の訓示を聞けなかった、早く飛び込んだ人は、助かった人が多くいたようです。

私は何回ともなく浮かび上がり、私の袴の間にはさまった材木につかまり助かりました。運が良かったのですが、その材木には十四〜十五人がつかまりましたが、泳ぎに自信のある者は他に移ったので人数が半分位になりました。私は泳ぎに自信がないのでそのままつかまっていました。船が助けにくる時には、大勢がいる所を先に助けるからです。私は結果的にはそのために助かったのです。

その間、敵潜水艦に対しては、駆逐艦などが爆雷投下をしているものもある。そのバーン！という響きがしている。それが我々の腹に響いていました。我々は、その間材木につかまりながら、軍歌などを歌っていました。

漂浮二時間ぐらい、十四時頃、護衛駆逐艦「浦風」のボートに収容されました。直ちに着替えようとしたが「浦風」には被服等の準備がないので、防暑服

の半ズボンだけでした。沈没場所は、北緯一二・八、東経一三七・四六だったといひます。戦死者は一二六三人であるというが、あの時はもつと死んだと思つたのですが、資料によれば、乗組員、二五〇〇人足らずというから、半数の人が助かったことになります。

六月二十日、助けてくれた「浦風」の通信要員が足りないため、直ちに応援して送受信を担当しました。

我々は、母艦が沈んで漂流して助かったのですから、何一つ持っていなかった。しかし、「浦風」も持ち物が少なかつたのだから、乗組員から、我々は物の恩恵を受けました。

昼頃、敵機が多数来襲しました。そのため航空母艦の「飛鷹」が沈没しました。その他の艦も損害を受けました。我々は「浦風」の甲板で見ていたら、敵機の機銃掃射を受けました。

空母から飛び立つた艦上戦闘機は洋上に着水し、一部は救助されましたが、他は沈んで搭乗員は戦死してしまいました。しかし、艦上攻撃機や艦上爆撃機は基地航空隊に帰投したといひます。

六月二十二日、「浦風」は沖縄の中城湾に待避し、我々は空母「千代田」に移乗しました。その時、田中辰雄君に会い、金一〇円と禪二枚、ちり紙二帖をもらつた時の嬉しかったことを忘れることができません。しかし、その田中君は、昭和十九年十月二十五日、エンガノ岬沖海戦で戦死してしまいました。

六月二十三日、艦は沖縄から瀬戸内海の基地柱島に向かう。二十四日、柱島帰着、戦傷者は病院船に移乗させられることになりました。私は二十五日、「浅間丸」に移乗し、通信科五人が一室に入つたのですが、その人達の名前は忘れてしまいました。二十七日、「浅間丸」で大竹港に入港、カッターで大竹海兵団第二十八補充部に一時入所しました。ところが、七月八日九日、軍用車にて大竹発、昼過ぎ久里浜着、保険班に入り、久里部隊（翔鶴編入）、同十一日、久里部隊を退隊、横須賀通信学校第七十三期、高等科電信術練習生として入校、交信班第十三分隊第十一班に入り、教育を受けました。

九月五日、第七十三期高等科電信術を卒業、式後に

退校、藤田兵曹他二十四人にて、東京海軍通信隊付を命ぜられ、即日入隊。十八日、第十二航空艦隊司令部付を命ぜられ、午前退隊し、単身常磐線經由。二十日、千歳基地着、第十二航空司令部に入隊。十月七日、第十二航艦司令部退隊し大空に向かいました。

同月八日、大湊航空隊に入隊、九〇三空です。十一月一日、任海軍二等兵曹、同月四日、大湊海兵団に派遣を命ぜられました。初任下士官教育のためでした。十二月四日、復帰を命ぜられ、現役満期でしたが、下士官に任官していたため、二年間再現役となりました。同十五日、第九〇三海軍航空隊付となり、大湊派遣隊勤務を命ぜられました。

昭和二十年一月一日、普通善行章一線付与。四月二十三日、九〇三空、稚内基地付となり、二十四日、基地着、設営作業をする。五月一日、飛行隊は進出せず。

六月三日、遠洲基地派遣を命ぜられ、稚内基地発、基地設営後、各種訓練、対空。ソ連参戦のため、作戦準備中、八月十五日、終戦。八月二十一日、基地発。

二十二日、軍艦大泊にて稚内基地に入る。

九月一日、「任、海軍一等兵曹」現役満期、復員す。思えば、乗船する軍艦がなくなり、だんだんと北方の勤務になり、最後は樺太でした。

## 強運だった海軍志願下士

福岡県 志坪 十郎

大正十二（一九二三）年二月十日、福岡県京都郡泉村に農家の三男として生まれました。

泉高等小学校を卒業すると、八幡市にある母方の製缶工場で見習修業をしていたのですが、一年で家に帰り、小倉の陸軍造兵廠へ入所しました。ご承知とは思いますが、造兵廠という所は兵器・弾薬等を製作する、重要な国の施設（大工場として有名）であります。以前製缶工場にいた関係もありますので、工作機械等は縁もあり、その若干の経験を生かされてか、砲弾製造の旋盤工として二カ年働いておりました。